

## 飛鳥資料館のみどころ (17)

飛鳥資料館秋期特別展のご紹介

「北方騎馬民族のかがやき 三燕文化の考古新発見」

10月16日(金)～11月29日(日)

飛鳥資料館では、今年の秋に「北方騎馬民族のかがやき－三燕文化の考古新発見」と題しまして、特別展をおこないます。

中国北東部の遼寧省西部で、騎馬民族の鮮卑族のひとつ慕容鮮卑が、3世紀初頭から5世紀半ばにかけて活躍した時代がありました。彼らは燕と呼ばれる国を337年に建国し、436年に北魏に滅ぼされるまで続きました。この時代は、前燕(337～370)、後燕(384～409)、北燕(409～436)の3つの時代に区分され、これらを合わせて、三燕と呼びます。

これら三燕時代の遺跡の調査は、1960年代からおこなわれてきました。なかでも、90年代以降の調査では、喇嘛洞墓地など大規模な遺跡が発見され、三燕文化の重要性が認識されるようになりました。さらに、日本の古墳時代との関連を示す出土遺物が存在することから、研究者の関心を集めました。

こうした中、奈良文化財研究所は1996年以降、遼寧省文物考古研究所と共同研究をおこなってきました。

今回の特別展では、喇嘛洞墓地の出土品をはじ

めとした三燕文化の遺物を展示していますが、そのみどころのひとつは、三燕文化の特徴である見事な金製品や金銅製品です。なかでも、頭飾りの歩揺は、慕容氏の名前の由来ともされるもので、見る人を魅了します。また、騎馬民族であった鮮卑族の遺跡からは、馬具類も多く出土し、当時の騎馬民族の姿が目につかぶようです。このほか、三燕の影響を受けた、国内の関連遺物も展示しています。今回の特別展で、皆様に北方騎馬民族による三燕文化の輝きをお楽しみいただければと思います。

(飛鳥資料館 成田 聖)



展示品の一部(喇嘛洞 I M10墓出土品)